国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和元年10月1日発行　第43巻第10号通巻第505号

月刊みんぱく

2019 10月号

特集

メキシコのアルテ・ポプラル

百花繚乱のアルテ・ポプラル
メキシコ先住民ウィチョルの毛糸絵　山森靖人／メキシコへのいざない　鈴木紀／メキシコ人の愛する骸骨人形　小林真憲
オアハカのカジェ（街路）とアート　山越英嗣
アルテ・ポプラルを収集した先達たち　鈴木紀

世界は出会いで出来ている

長尾 洋

子供の頃は、昆虫採集、お絵かきやレゴ、工作に夢中だった。小さな角材を見つけると釘と金槌で十字に打ち付け飛行機を作り、いろんな角度に傾けては宙に飛ばす格好をしてみせた。身の回りにある素材で作る。これは私がよく使っているコラージュという技法の基礎となったようだ。しかし大人になっていくら作品制作に没頭しようとも、当時の好奇心と熱量には敵わない。

そんな私は以前、五年半ほどドイツ・ベルリンを拠点にしていたこともあり、現地ヨーロッパ人だけでなく、世界各国の人たちと触れ合ってきた。人びとが縦横に行き交う様を見ると、未来は一体どうなるのだろう?と、私には父方の曽祖母にアイヌ人がいることもあり、普通に日本で生活していたら気にも留めないことに途轍もない興味が湧いてきた。

約二〇〇万年前に誕生したとされる我々の祖先はアフリカから世界各地へと散らばり、様々な発展を遂げた。しかしこの現代社会が取りまく世界はますます統一化され、さらにもう数百年もすれば、多様な固有の文化はすべて博物館のガラス越しにしか見ることができなくなるのではと思ったりもする。昨今の森林伐採で消滅の危機に瀕しているアマゾンの先住民も私たちのなかの誰かだと思うと、他人事ではない。残念ではあるがこれもまた現生人類の営みだとすれば、世界の流れを止めるのは容易ではない。

このモヤモヤする気持ちを晴らすため、現在でも近代化される以前の姿を残す先住民に会いたいと思った私は、二〇一六年にはメキシコへ古代文明と豊かな色彩のルーツを探りに行き、二〇一七年はナミビアのヒンバ、ヘレロ、デンバの三部族を訪ね、そしてその翌年にはモンゴルのゲルでホームステイをし、自然と共存する彼らのもとで貴重な体験を沢山させてもらった。どの地域も英語はほとんど通じず、身振り手振りで会話をし、出されたものはなんでも食べた。今年はインドのアートフェスティバルにも招待された。一八もの州公用語が使われ、様々な民族と宗教、文化で成り立つ社会はまるで世界の縮図を見ているようだった。気になることはすぐに本やネットで調べるようになったが、やはり実体験ほど心に刺さるものはない。

「僕らは未来の先住民」と付けたテーマも、直接的な交流が減っている現代人に本能回帰してもらいたいと思ったからだ。きっとエキサイティングな未来がやってくると信じて、私は今日も道具と素材を手に作品づくりに打ちこむのである。

プロフィール
1981年神奈川県生まれ。アーティスト。名古屋造形芸術大学卒業。「僕らは未来の先住民」をテーマに、コラージュを使った作品をニューヨーク、ロサンゼルス、東京、パリなど世界各都市で展示。名古屋PARCOとのコラボレーション、JRA中京競馬場年間ポスターのイラスト制作を手がけるほか、アメリカのアートフェアSCOPE Miami BeachやLA Art Showに出品、UNIQLOクリエイティブアワードなどで作品が入選している。

月刊 みんぱく

10月号目次

1 エッセイ 千字文
世界は出会いで出来ている
長尾 洋

特集 メキシコのアルテ・ポプラル

2 百花繚乱のアルテ・ポプラルへのいざない
鈴木 紀

4 メキシコ人の愛する骸骨人形
小林 貴徳

5 メキシコ先住民ウィチョルの毛糸絵
山森 靖人

7 オアハカのカジェ（街路）とアート
山越 英嗣

8 アルテ・ポプラルを収集した先達たち
鈴木 紀

10 ○○してみました世界のフィールド
厳粛で、愉しげな、ハンティのクマ遊び
大石 侑香

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
鷲の王ジャタユ
福岡 正太

16 みんぱく回遊
ラピタ土器と鋸歯印文
小野 林太郎

18 シネ倶楽部 M
人生の驚きと不思議に心打たれる映画
――「ワンダーストラック」
飯泉 菜穂子

20 ことばの迷い道
「青野菜」は青色?
磯部 大吾

21 次号予告・編集後記

特集

メキシコのアルテ・ポプラル

まもなく開幕の企画展では、色彩豊かで迫力ある現代メキシコの造形を展示する。本特集では、おもな展示資料を紹介しつつ、メキシコの文化や歴史が映し出されるその造形について考えてみたい。

企画展
アルテ・ポプラル――メキシコの造形表現のいま
会期 一〇月一〇日（木）―一二月二四日（火）／場所 本館企画展示場

百花繚乱（ひゃっかりょうらん）のアルテ・ポプラルへのいざない

鈴木紀（すずきもとい） 民博 人類文明誌研究部

アルテ・ポプラルは、スペイン語で「芸術」を意味する名詞アルテと、「人びとの」を意味する形容詞ポプラルを組み合わせたことばである。メキシコのスペイン語でアルテ・ポプラルといえば、特別な才能に恵まれた芸術家や専門の美術教育を受けたアーティストによる美術作品ではなく、感性豊かな市民と熟練した職人たちによる造形表現を意味する。

国立民族学博物館では二〇一九年一〇月一〇日から一二月二四日まで企画展「アルテ・ポプラル――メキシコの造形表現のいま」を開催する。ここでは、そのテーマであるアルテ・ポプラルについて概説する。

アルテ・ポプラルの歴史

首都のメキシコ市にあるアルテ・ポプラル美術館によれば、メキシコのアルテ・ポプラルにはふたつの歴史的ルーツがあるという。ひとつは土着的なルーツ、もうひとつは混淆（こんこう）的なルーツである。前者は、スペイン人がメキシコに来た一五一九年以前に栄えていたメソアメリカ文明に遡るものである。同美術館の「アルテ・ポプラルのエッセンス」展示室には、先スペイン時代に作られた土器と、現代のメキシコ人作家による陶器が一緒に並んでいる。これは陶器作りのわざの連続性を示している。後者は、一六世紀から一九世紀にかけてのスペイン植民地時代に形成された混淆文化を意味する。

新旧の陶芸作品が並ぶアルテ・ポプラル美術館（撮影：メキシコ市、2015年）

張り子人形（蛙）（H0326369）

この時代、メキシコにはヨーロッパの文化だけでなく、スペイン植民地だったフィリピンから伝わったアジアの文化と、カリブ海地域に導入された黒人奴隷制度の影響でアフリカの文化が流入し、これらの文化が土着の文化と融合して独自のもの作りの伝統が生まれた。

日本語に訳すと？

本企画展の準備段階で、最大の問題はアルテ・ポプラルを日本語でどう表現するかだった。直訳すれば「民衆的芸術」となるだろう。しかしこのことばは、日本で一九二六年に柳宗悦（やなぎむねよし）らが提唱した「民芸（民衆的工芸）」と混同されることが懸念された。もちろん柳の「民芸」概念は、手仕事による日用品のなかに「用の美」を見出すという美意識に基づいており、その意味では、メキシコのアルテ・ポプラルと通じる部分がある。しかし、時代も場所も異なるふたつの造形表現の類似性を安易に印象づけるようなことばづかいは、避けるべきだと思われた。

張り子人形（猫）（H0326370）

もうひとつの候補は英語のフォークアートという表現である。実際、メキシコの美術館では、アルテ・ポプラルの英訳としてこのことばがよく用いられる。しかしフォークアートは、都市を基盤に展開する近代的な芸術活動に対して、その対極にある、ある種の前近代的な伝統を保持する人びとの作品というニュアンスがある。ところが現代のメキシコにおいてアルテ・ポプラルがその存在を明確に主張するのは都市空間に他ならない。そのためアルテ・ポプラルをフォークアートと言い換えることは誤解のもとであると判断した。

さらに英語のポピュラーアートという案も浮かんだが、これは英米で一九五〇年代に流行した芸術の一様式としてのポップアートを思わせることばであり、メキシコの造形作品をあらわすのにふさわしいとは思えなかった。

こうした理由から、本企画展では「アルテ・ポプラル」をそのまま使用することにした。企画者として来館者に期待したいのは、展示場に並ぶ作品のイメージを、既成概念に翻訳することなく、そのまま「アルテ・ポプラル」として受け止めていただくことである。

テオドラ・ブランコ作
陶製人形（H0326372）

企画展の構成

本企画展は、「コラの仮面」、「ウイチョルの毛糸絵」、「陶器」、「カジェ（街路）」、「生命の木」の五つのセクションから構成される。はじめのふたつは先住民族の作品、後の三つはおもにメスティソ（混血者）の作品である。四番目の「カジェ（街路）」では、アルテ・ポプラルに関する新しい解釈を示した。従来、典型的なアルテ・ポプラルは民芸品店で売られているような装飾品とみなされていたが、先述のように現代のメキシコでアルテ・ポプラルが躍動する場所は、都市の街路や広場である。スペイン語で街路を意味するカジェと名付けたこのセクションでは、メキシコ市のカジェを飾る骸骨人形と、地方都市オアハカで展開するストリートアートに焦点をあてた。また主要な展示資料であるコラの仮面や生命の木などは、アルテ・ポプラルの収集家から寄贈されたものであることも、本企画展の特色のひとつである。

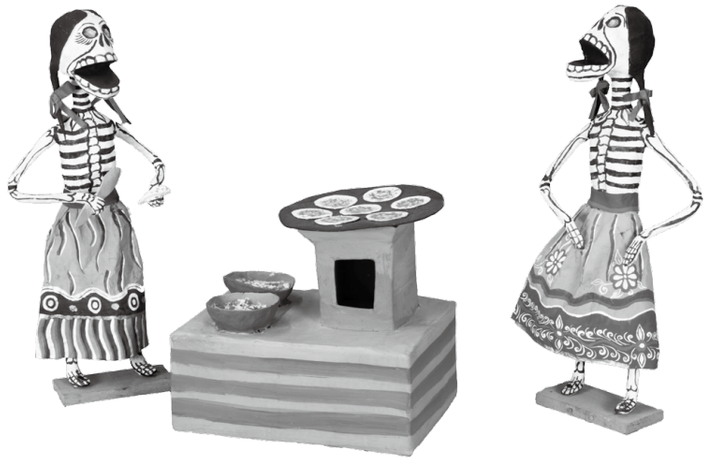
次ページ以降では、メキシコ市の骸骨人形、ウイチョルの毛糸絵、オアハカ市のストリートアート、および寄贈資料について紹介することにしたい。

メキシコ市の街路を飾る骸骨人形
（撮影：アンドレス・メディーナ・エルナンデス、メキシコ国立自治大学人類学研究所、2017年）

メキシコ人の愛する骸骨人形

小林貴徳　関西外国語大学助教

故人の魂が現世に回帰するという意味では、メキシコの死者の日は日本のお盆のようなものかもしれない。ただ異なるのは、粛々と心静かに故人を偲ぶのではなく、死者の日には活気に満ちたお祭りムードが社会全体を覆ってしまう点である。そもそも死者の日とは、カトリック教会暦の諸聖人の日（一一月一日）と死者の日（同二日）にあたるが、一〇月も半ばを過ぎると、人形や切り紙、仮装したものなど、さまざまな骸骨が街に姿を見せるようになる。各家庭に準備される祭壇には、故人の写真とともに、故人が好んだ飲食物、花飾りや切り紙、砂糖菓子の骸骨などが供えられ、他方、マリーゴールドの花で飾られた墓地は、歌い、飲み、食べ、夜を徹して死者と語らう人びとで溢れかえる。



骸骨人形（H0131677、H0131678）
トルティージャを作る骸骨婦人と愉快に踊りに興じる骸骨婦人

愛おしい骸骨

「メキシコ人は、死としばしば出合い、死を茶化し、かわいがり、死と一緒に眠り、そして祀る。それは彼らが大好きな玩具の一つであり、最も長続きする愛である」、詩人オクタビオ・パスはメキシコ人性を省察した『孤独の迷宮』（高山智博・熊谷明子訳、法政大学出版局、一九八二年）でこうしるした。死を象徴する骸骨はけっして忌み嫌うものではなく、メキシコ人にとって愛すべき存在であるようだ。それはこの国を代表するアルテ・ポプラル、骸骨人形の容貌からも窺える。木材や粘土、厚紙で作られた骸骨たちは、酒を飲み、肩を組み、踊り、馬で駆ける、じつに活き活きとした姿に造形されている。

陰鬱や悲哀、不気味さといった陰はなく、滑稽で底抜けな陽気さを特徴とする骸骨は、その来歴を版画家ホセ・グアダルーペ・ポサダに求めることができる。一九世紀後半から二〇世紀初めにかけて数々の風刺画を描いたポサダは、作品のなかで富裕層や政治家を皮肉り、世の虚しさを嘲笑う役割を骸骨に演じさせた。なかでもメキシコ壁画運動を牽引した巨匠ディエゴ・リベラが後に「ラ・カトリナ」と命名した骸骨婦人はメキシコでもっとも有名な骸骨となった。ヨーロッパ風の美しい帽子をかぶった、豆売りのインディオ女性を骸骨で表現したそれは、急速な近代化を遂げようとするこの国の姿を巧みに晒す作品だった。

ホセ・グアダルーペ・ポサダ作《豆売りの骸骨》1913年

街に蘇る骸骨

二〇世紀末以降、死者の日や骸骨を取り巻く状況は大きく変わった。とりわけ米国に由来するハロウィンのメキシコ社会への浸透は特筆すべきだろう。市場経済を背景とするハロウィン関連商品の流入は、一部の知識人が文化的伝統の侵食にほかならないとたびたび紙面で訴えかけるほどの勢いであり、骸骨ですらハロウィン仮装に取り込まれた様相だった。二〇〇三年に死者の日が「死者に捧げる原住民の祭礼」としてユネスコ無形文化遺産リストに記載されたことによって伝統復興の兆しが見られたものの、死者の日に対するハロウィンの攻勢は止む気配がなかった。

外部の脅威に晒された死者の日に活力を与えたのが米国の娯楽作品だったのは皮肉なことである。二〇一五年公開のアクション映画「007 スペクター」では、その冒頭にメキシコ市の死者の日パレードが描かれる。さまざまな骸骨が大通りを埋め尽くすシーンは見る者に強烈な印象を与えるが、それは作品上の演出であり、そんな行事は現実には存在していなかった。ところが翌年の死者の日、首都の中心部レフォルマ通りは「007」さながらの大規模パレードの舞台となった。骸骨を模した巨大な張りぼてが列をなし、「ラ・カトリナ」に扮した女性の踊り手チームやタキシードの骸骨たちがカジェ（街路）を練り歩いた。二〇一八年に第三回を迎えたこのパレードは、市政主催の恒例行事としてすでに定着しつつある。まさに「嘘から出たまこと」だ。二〇一七年公開の「リメンバー・ミー」は世界中でヒットした長編アニメ映画として記憶に新しいが、やはりこの作品もメキシコが誇る文化的伝統を国内外に強く印象付けるものとなった。

ここ数年、死者の日の衰退を危惧する記事をすっかり見かけなくなった。どうやらハロウィンによる侵食は、街に蘇った骸骨の陰に潜んでしまったらしい。メキシコ人が愛してやまない骸骨が帰ってきたのだ。

陶製骸骨（H0153955）
肩を寄せ合う男女の骸骨

メキシコ先住民ウィチョルの毛糸絵

山森靖人　関西外国語大学准教授

メキシコ先住民ウィチョル（自称ウィラリカ）が作る毛糸絵は、そのカラフルな色使いと独特な絵柄で、見る者の想像力をかきたてる。ウィチョルはなぜ毛糸絵を作るのか、そこに何が描かれているのか。毛糸絵が作られた理由を紹介し、その絵解きをしてみたい。

ウィチョルの生業

ウィチョルの暮らす先住民共同体は、ハリスコ州とナヤリト州の州境地帯、西シエラ・マドレ山脈内にある。山地に点在する集落で、彼らは農牧業を中心とした自給自足的な生活を営んできた。一方、ウィチョル社会と外部社会との接触・交流は増え続け、彼らは現金を得る手立てを模索するようになった。現在、ウィチョルのおもな現金収入源は、大農園や都市部での出稼ぎである。さらに、一部ではあるが、民芸品の製作販売に従事する者も見られる。毛糸絵をはじめ、ウィチョルが手がける民芸品は、現金を得る必要性に迫られて創り出された。

毛糸絵の誕生と変化

ウィチョルの毛糸絵は、薄い木の板に蜜ろうを塗り、その粘着力で長い毛糸を貼りつけて作られる。この製作技法は、シャーマンが神々の世界を知るために用いるニエリカとよばれる呪物に由来する。呪物ニエリカにはさまざまな形態が見られるが、そのひとつに、石板や木板に彫刻や毛糸貼付で鹿やトウモロコシなどを描いたものがある。これらは、聖地への供え物や神殿の壁飾りにされる。その一方、毛糸絵は、呪物としてではなく、

販売を目的として作られたニエリカだといえる。

実際、ウィチョルは、毛糸絵のことをニエリカとよび、神聖なものとみなしている。そのため、毛糸絵作りに携わるのは、ウィチョルの世界観を熟知し、そこから絵柄のインスピレーションを得ることのできる者、すなわちシャーマンたちである。

一九五〇年代、毛糸絵作りが盛んになりはじめた。続く一九六〇年代、それまでは比較的シンプルな絵柄だった毛糸絵が、ラモン・メディナ・シルバというシャーマンの手によって、極彩色で複雑な絵柄へと変化を遂げた。一九六一年にウィチョル展示室を設立したサポパン大聖堂の神父が、毛糸絵の商品価値を高めるため、より人目を引くウィチョルらしい絵柄を描くよう、彼に助言を与えたのである。

上：聖週間祭儀を執りおこなうシャーマン（撮影：2008年）
下：聖地ウィリクタに奉納された呪物ニエリカ（撮影：2007年）

毛糸絵の絵解き

毛糸絵が、一見意味不明な絵柄に「進化」できたのには訳がある。ウィチョルは、聖地ウィリクタに生育する、ペヨーテとよばれるサボテンを神聖視している。幻覚性植物であるペヨーテは、これを摂取した者に極彩色の幻覚を体験させる。彼らは、ペヨーテによる幻覚で、神々と出会い、直接交流することができると信じている。シャーマンたちが毛糸絵に描くのは、そのトランス体験のなかで眼前に広がる、色彩豊かなウィチョルの神話や信仰の世界なのである。

グアダルーペ・デ・ラ・クルス・リオス作
毛糸絵《我らが師としての火神、長老、ペヨーテ》
（H0160164）

最後に、企画展で展示される二枚の毛糸絵を紹介したい。どのようなシーンが描かれているか想像できるだろうか……。一枚は聖地ウィリクタにおける祖父なる火タテワリと彼のことばを人びとに伝えるシャーマンである。もう一枚は、ペヨーテと鹿の関係を物語る神話である。三本のペヨーテとその化身である二頭の鹿、そのあいだには祖父なる火タテワリが描かれている。ウィチョルの神話では、海からあらわれた聖なる鹿が聖地ウィリクタまで歩き、その足跡がペヨーテになったと語られる。それぞれ登場する人やものは、すべて意味があってそこに描かれている。

聖地や集落で執りおこなわれる祭儀において、シャーマンは、夜を徹して神話を歌い語る。わたしたちは、毛糸絵の絵解きをとおして、彼らが語り伝えてきたウィチョルの壮大なる神々の世界を、ほんの少し垣間見ることができるのである。

ホセ・ベニテス・サンチェス作
毛糸絵《ウィリクタ（聖地）でペヨーテはどのように現れるのか》（H0160223）

オアハカのカジェ（街路）とアート

山越英嗣（やまこしひでつぐ）
早稲田大学助教

メキシコの都市オアハカのカジェ（街路）には、光と闇が交錯している。美しいこの町は、色とりどりの衣装を身につけた女性たちが石畳の小道を行き交い、果物や花を扱う物売りの声で活気に満ちている。しかし、ふとカジェ（街路）に立ち並ぶ建物の壁面に目をやると、そこに貼られた奇妙なポスターの存在に気がつくだろう。これらを制作したのは、現地で活動するストリートアーティストたちである。彼らが何を目的としてこうした作品を制作しているのかを知るためには、二〇〇六年にオアハカ市で起きたある事件に遡る必要がある。

ライン、ウォンズ（ASARO）作《バリケードの聖母》2006年
（撮影：フランコ・オルティス、2006年）

「ストリート」からの抵抗

二〇〇六年六月、オアハカ市内の広場では、公立学校の教員たちがテントを張り、教育環境の改善を求めてストライキをおこなっていた。一四日の未明、そこへ州政府警官隊が彼らを強制退去させるために突入し、衝突の末に多くの負傷者を出す惨事が起きた。州政府の暴力を批判する教員とその賛同者たちは団結してAPPO（オアハカ人民民衆集会）とよばれる組織を結成し、州知事の辞任を要求するようになった。やがてAPPOは市内へと続く道路をバリケードで封鎖して、半年にわたって町を実効支配した。

この期間、市内には州政府の暴力に抗議する無数のストリートアートが出現した。作品を制作したのは、現地の美術学校に通う農村出身の若者たちであった。彼らは作品を通じて、社会変革の実現や、民衆の連帯を求めるメッセージを発信した。とりわけ、ASARO（オアハカ革命芸術家集会）とよばれるグループが生み出した《バリケードの聖母》のイメージは、抗議運動を象徴するアイコンとなった。これはメキシコで信仰を集める「グアダルーペの聖母」をモチーフとしたもので、ガスマスクや炎に燃えるタイヤ柄のマントは、抗議運動の様子を象徴的にあらわしている。作者によれば、荒廃した町で、人びとは心の拠り所を求めており、聖母のポスターの前には祈りを捧げる者が後を絶たなかったという。

ジェスカ（ASARO）作《パンク・サパタ》制作年不明
（撮影：2013年）

「メキシコ革命」イメージの資源化

彼らの作品には、しばしば「メキシコ革命」や「先住民」などのイメージが、独特のアレンジを加えて描かれる。例えば、《パンク・サパタ》と名付けられた作品には、頭髪をモヒカンにした二〇世紀初頭のメキシコ革命の英雄、エミリアーノ・サパ

タとともに、「革命」としるされたコカ・コーラの缶が描かれている。

また《メキシコの最後の晩餐》は、名画《最後の晩餐》を模したものである。食卓の上の皿には、先住民出身で一九世紀後半に大統領を務めたベニート・ファレスの頭部が載っており、額には銃痕が見える。原画のキリストの位置には、麻薬組織のリーダーが座り、周囲には大富豪カルロス・スリムやサリナス元大統領など、富と権力の中枢にある人びとが描かれている。この作品は、権力者たちがファレスの理念を無化してしまったことを批判している。

このように、ASAROの作品のなかで、英雄たちはつねに民衆とともにあり、社会の不正に戦いを挑む存在として描かれている。そして、「メキシコ革命の精神」が今なお社会に息づいていることを、カジェ（街路）からわれわれに語りかけているのである。

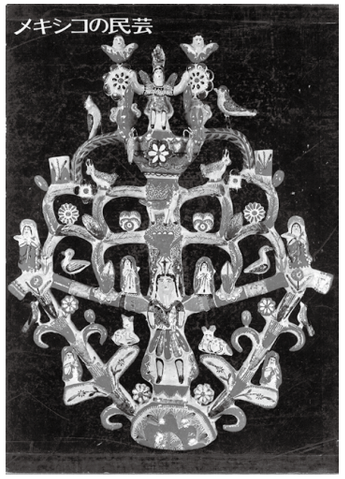
ジェスカ（ASARO）作《メキシコの最後の晩餐》2012年
（撮影：2013年）

ASAROが拠点とするエスパシオ・サパタと、そこに集う若者たち
（撮影：2013年）

アルテ・ポプラルを収集した先達たち

鈴木紀（すずき もとい）
民博 人類文明誌研究部

企画展「アルテ・ポプラル――メキシコの造形表現のいま」で展示する資料のうち二三点は二〇一六年度と二〇一七年度に国立民族学博物館に寄贈されたものである。導入部の張子の人形や陶器など四点、先住民族コラの仮面一〇点、タラベラ焼の陶器一点、骸骨の姿をしたユダ人形など七点は、東京のメキシコ料理店店主、立花雅子（たちばなまさこ）氏から寄贈していただいた。また「生命の木」セクションの中央に立つ大型の生命の木の焼き物は、東京で陶器とインテリアの店を経営する河村美代子（かわむらみよこ）氏から寄贈されたものである。



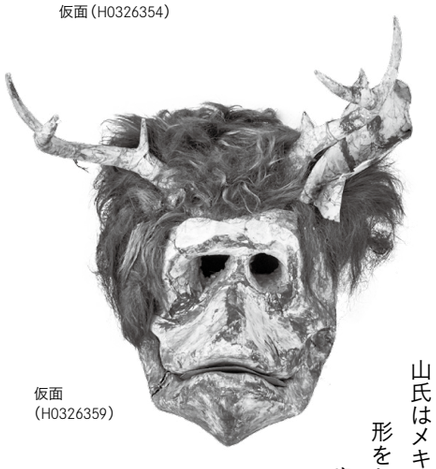
利根山光人『メキシコの民芸』1972年（版元品切）

利根山コレクション

立花氏の資料は、彼女の父、利根山光人（とねやまこうじん）氏（一九二一～一九九四）がメキシコで収集したものである。利根山氏はメキシコの風景や人物を描いた画家として知られている。アルテ・ポプラルをこよなく愛し、作品制作のかたわら、その収集にあたった。彼のコレクションの一端は、『メキシコの民芸』（平凡社、一九七二年）や『メキシコ民芸の旅』（平凡社、一九七六年）で見ることができる。また利根山氏はメキシコ各地の文化や風俗、古代文明に関するエッセイを多数発表している。さらに同氏の著作『古代メキシコ拓本集』（美術出版社、一九七一年）は、古代文明の遺跡に残された石碑の拓本を集めたもので、考古学的な資料として価値が高い。わたしがこの本を初めて手にとったのは、二〇一〇年五月、メキシコの隣国ベリーズでのことだった。インタビュー調査の際、マヤ文明の貴重な資料として地元の方から紹介されたのがこの本だったのである。

利根山氏が収集した資料のなかでも、特に貴重なのは、コラの仮面と骸骨の形をしたユダ人形である。メキシコ中西部ナヤリト州の山間部に住む先住民族コラは、カトリックの復活祭のときに仮面を作る。若者たちがそれを被って三日三晩儀礼をおこなうのだ。仮面は祭りの終わりとともに捨てられてしまうため、利根山氏は最後まで祭りに参加し、その場で交渉して入手したと思われる。ユダ人形も、本来、復活祭のときに悪を象徴するものとして燃やされるものである。利根山氏はメキシコ市で、骸骨の形をしたユダ人形を燃やされる前に収集したのである。

仮面（H0326354）



仮面
（H0326359）

河村コレクション

一方、生命の木は河村氏の父、河村幸次郎（かわむらこうじろう）氏（一九〇一～一九九四）が収集したものである。陶芸の町メテペックのアルフォンソ・ソテノ氏の作品で、一九七〇年に開催された日本万国博覧会のメキシコ館に展示された二点のうちの一点である。万博終了後、幸次郎氏が二点とも引き取り、東京で保管した。もう一点は、現在、山口県の下関市立美術館に収蔵されている。生前、幸次郎氏は実業家として活躍するかたわら、日本近代絵画や古代オリエントをはじめとする世界の工芸品の収集に尽力した。彼のコレクションの概要は『芸術は魂のたべもの　河村幸次郎と美の世界』（下関市立美術館、二〇一三年）、および著書『世界の民芸』（講談社、一九八四年）でうかがうことができる。

貴重なメキシコのアルテ・ポプラルを収集した二人の先達と、それを国立民族学博物館におさめていただいた二人の寄贈者がいなければ、本企画展をこれほど充実したものにすることはできなかったであろう。

洗礼用桶（H0326373）

下関市立美術館編『芸術は魂のたべもの　河村幸次郎と美の世界』2013年

○○してみました世界のフィールド

厳粛で、愉しげな、ハンティのクマ遊び

大石（おおいし） 侑香（ゆか）
民博 学術資源研究開発センター

ヒグマの肉を罵倒してみました

スノーモービルでトナカイ群を探す筆者
（撮影：エヴゲーニー・エプリン）

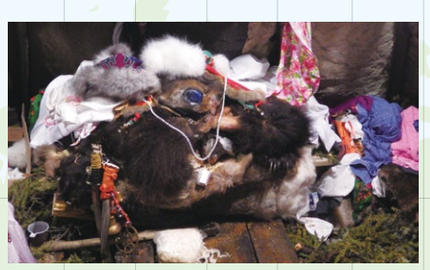
特定の動物を神聖なものと崇める文化は世界各地で見られ、その信仰や人とのかかわり方もまたさまざまだ。今回は、西シベリアに暮らすハンティがおこなう「クマ遊び」というユニークな儀礼について紹介する。

クマ遊びの調査

二〇一六年三月にロシア連邦ヤマル・ネネツ自治管区のスィニャ川上流でおこなわれたハンティのクマ遊びに初めて参加する機会を得た。ハンティは西シベリアの森林地帯に居住している。現在は都市部で暮らす者も多いが、都市から遠く離れた森のなかで漁撈（ぎょろう）や狩猟採集、トナカイの牧畜を営んで暮らす者もいる。わたしは、こうした生業活動を中心とした寒冷地における環境利用技術に関心をもち、調査してきた。彼らの信仰や儀礼について調査することはあまりなかったため、このクマ遊び調査では、見ること・することすべてが新鮮だった。

ハンティにとってヒグマはたいへん神聖な動物だ。しかし、森でヒグマに出会えば、狩って、肉と毛皮を利用する。この地域の人びとはヒグマを天神の息子の地上における姿とみなすため、森のなかでヒグマを獲ったさいには、その場で狩猟儀礼をおこなうだけでなく、さらにその後何年かかけて周期的にヒグマの霊魂を天空へ送り返す儀礼もおこなう。後者を総称的に「クマ遊び」といい、この地域では「ヤクトゥイ・ホット」（踊る家」の意）という。人里近くに天幕を設置し、そのなかに飾り付けられたヒグマの頭と毛皮を招き入れる。そして、ヒグマの地上でのおこないを長々と語る歌やさまざまな精霊たちの歌や踊り、寸劇、占い、家畜の供犠などにより、数日間かけてヒグマをもてなす。途中、何度も休憩が入り、魚や野生の鳥獣、家畜のトナカイ等を共食する。もともと男性だけでおこなう儀礼であったが、現在では女性も決められた場所で見学と共食、一部の踊りをすることは許されている。ここでは、真剣かつ面白おかしなヒグマの肉の共食について紹介したい。

天幕の準備（写真はすべてロシア、ヤマル・ネネツ自治管区にて 2016 年に撮影）



飾り付けられたヒグマの頭部と毛皮

ロシア連邦
ヤマル・ネネツ自治管区
★

ヒグマの肉を食べる作法

儀礼の中盤では、茹（ゆ）でたヒグマの肉を共食する。神聖なヒグマの肉を食べるには、いくつかの作法に従わねばならない。それらは通常人間がすることとは反対のふるまいをして、人間がしているのではないということをヒグマに示していくような作法だ。

まずは、ヒグマの肉に俗語や卑語を浴びせかけて罵る。女性は天幕のなかで、男性は外でそれぞれ食べるため、遠慮なく叫ぶことができる。わたしが、普段口にしたら怒られるような下品な俗語を使っていいのかと戸惑っていると、そばにいた方が「大きな声で言わないといけない。日本語でもいいから。彼（ヒグマのこと）は何語でも理解できる」と促し、男根を意味するハンティ語の卑語を教えてくれた。わたしが教えてもらった卑語をまねて言うと、発音がおかしかったらしく、皆が笑い転げた。お返しにわたしが日本の卑語とその意味を教えると、年配の女性たちが面白がってこぞってまねして叫んだ。あまりに大きな声で叫んだため、天幕の外にいる男性たちにも聞こえたようで、天幕をたたいて茶化してきたことで、さらに盛り上がって大笑いした。

こうしたひととおりの罵倒と大騒ぎを終えてから、やっと肉を食べることができる。ヒグマの肉を直接手で持ってはならず、木の枝を削って先を尖（とが）らせた棒で肉塊を串刺しにして口へ運ぶ。串刺しにするときには「カルカルカルカルカルカル……」と言わねばならない。木の棒は鳥のくちばしを、「カルカル」というのは鳥の鳴き声を模している。なぜこうするかというと、人間がヒグマの肉を食べているのではなく、鳥が食べているようにヒグマに思わせるためだそうだ。

さらに、他の肉や魚と異なり、ヒグマの肉には塩等の味付けを一切してはならない。そのため、味が引き立たず、正直なところとても物足りなかった。それを隣にいた方と共感したいと思い、軽い気持ちで話しかけようとしたが、食卓を囲む人びとがあまりに真剣な面持ちで食べていたため、できなかった。天幕内はさきほどの大笑いとは打って変わって重々しい雰囲気になっていた。

送り儀礼であるクマ遊びの過程には、厳粛で真剣な場面もある。しかし、その一方で、普段なかなか会えない遠くの親戚が集まり、一緒においしいものを食べ、歌い、踊り、冗談を言い合い、コントのような即興寸劇を見て笑い、雪をかけ合ったり相撲をとったりして遊ぶ。クマ送り儀礼は、意外と愉快で、明るく楽しいものであった。

上：茹でたヒグマの肉を食べる人びと
下：歌や踊りで盛り上がる天幕の内部

みんぱく Information

観覧料改定のお知らせ

2019年6月6日(木)より、本館展示観覧料を左記のとおり改定いたしました。なお、特別展示観覧料はその都度、別に定めます。何卒、よろしくお願い申し上げます。

一般	大学生	高校生以下
580円	250円	無料

各種割引等につきましては、みんぱくホームページをご覧ください。

特別展
「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」

なぜ人類は、この世のキワにいるかもしれない不思議な生きものを思い描き、形にしてきたのか？ 奇妙で怪しい、不気味だけどかわいい、世界の霊獣・幻獣・怪獣が大集合！ 現代のアーティスト・漫画家・ゲームデザイナーたちによるクリーチャー制作も紹介し、妖怪やモンスターの源泉にある想像と創造の力を探ります。

会期　11月26日(火)まで
会場　特別展示館

トゥピラク
(グリーンランド)

■関連イベント

ナレッジキャピタル超学校
「みんぱく×ナレッジキャピタル　想像界の奥へ」
第2回
「常ならざる音
――見えないものを展示する」

日時　10月8日(火)19時～20時30分
　　(受付開始18時30分)
会場　CAFE Lab.(グランフロント大阪北館
　　ナレッジキャピタル1階)
登壇者　山中由里子(本館 教授)
　　辻邦浩(本館 特別客員教授)
※要事前申込(定員50名 中学生以上)、
　要ドリンク代500円

ナレッジキャピタル超学校
「みんぱく×ナレッジキャピタル　想像界の奥へ」
第3回
みんぱく特別展示ツアー
特別展「驚異と怪異 ――想像界の生きものたち」見学ツアー

実行委員長が特別展の見どころ、裏話を熱く語りながらご案内します。

日時　10月20日(日)11時～12時30分
　　(受付開始10時30分)
会場　特別展示館ほか
※要事前申込(定員30名 中学生以上)、
　要特別展示観覧券(団体料金)

みんぱく映画会・第46回みんぱくワールドシネマ
「ワンダーストラック」

異なった時代を生きる少年と少女が、数々の困難を乗り越えて、ニューヨークの自然史博物館で〈驚きと幸せの一撃〉に出会い、運命に導かれていく姿を描いたアメリカ映画。美しい映像世界の中で、博物館の始まりについて考えたいと思います。

PHOTO : Mary Cybulski

日時　11月9日(土)13時30分～16時
　　(開場13時)
会場　本館セミナー室
司会・解説　山中由里子(本館 教授)
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。
※申込不要、要展示観覧券(定員先着200名)
※参加券を11時からインフォメーション前(本館1階)にて配布します。

企画展
「アルテ・ポブラル
――メキシコの造形表現のいま」

メキシコでは、職人や一般の人びとによる素朴でおもしろい造形表現をアルテ・ポブラルと呼びます。先住民族の仮面と毛糸絵、地域色豊かな陶器、都市の街路にあふれる骸骨人形や、生命の木といわれる焼き物のオブジェなど、現代のアルテ・ポブラルの姿を紹介します。

会期　10月10日(木)～12月24日(火)
会場　本館企画展示場

生命の木

■関連イベント

研究公演
「ソン・ハローチョ
――国境を越えるメキシコの歌」

メキシコの伝統音楽ソン・ハローチョを、アメリカのロサンゼルスで活動するグループ「カンバラチェ」を招きご紹介します。

日時　10月27日(日)
　　13時30分～15時45分(開場13時)
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料(定員300名)

親子deワークショップ
「メキシコのパンづくり
――死者のパン」

日時　10月20日(日)14時～16時
　　11月24日(日)14時～16時
会場　本館職員食堂、企画展示場
講師　エルサ・マルティネス(メキシコ料理研究家)、小林貴徳(関西外国語大学助教)、鈴木紀(本館 教授)
※要事前申込(定員各日9組)、
　大人と子どものペア(4歳以上推奨)、
　参加費500円(材料費、保険料)、
　要展示観覧券
※受付期間
　10月20日(日)実施分：10月2日(水)まで
　11月24日(日)実施分：11月6日(水)まで

ギャラリートーク

日時　10月17日(木)、10月31日(木)、
　　11月7日(木)、11月21日(木)、
　　12月5日(木)、14時～
場所　本館企画展示場
講師　鈴木紀(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

●みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを特別展「驚異と怪異」の会期中に運行します。

運行日　11月26日(火)までの土曜・日曜・祝日
　　1日11往復、所要時間10分、無料
運休日　平日、11月2日(土)、3日(日・祝)、
　　4日(月・休)、16日(土)、17日(日)
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細はみんぱくホームページをご覧ください。

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

お問い合わせ(本館 広報係)
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくゼミナール

日時　10月19日(土)13時30分～15時(開場13時)
会場　本館セミナー室
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。
※申込不要、参加無料(定員先着200名)
※参加券を12時30分からインフォメーション前(本館1階)にて配布します。

第496回
珍獣・霊獣・幻獣・怪獣
――人はなぜモンスターを想像するのか？

講師　山中由里子(本館 教授)

世界各地の人びとが創りだしてきた不思議な生きものたち。水に潜み、天に羽ばたき、地を巡る、想像界の生物多様性を探求するとともに、人類に普遍的な心の動きやイメージのつくられ方について考えます。

ソロモンと百獣、ニザーミー
『五部作』写本口絵（イラン）

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

10月6日(日)14時30分～15時　特別展示館
特別展「驚異と怪異
――想像界の生きものたち」を巡って
話者　笹原亮二(本館 教授)

10月13日(日)14時30分～15時　南アジア展示場
ガンディーの携帯用手紡ぎ車
話者　三尾稔(本館 教授)

10月20日(日)14時30分～15時　本館ナビひろば
インドにおける異形の神々
話者　松尾瑞穂(本館 准教授)

11月3日(日・祝)14時30分～15時15分　本館ナビひろば
ラテンアメリカのアルテ・ポブラル
話者　鈴木紀(本館 教授)

11月10日(日)14時30分～15時　本館ナビひろば
「旧世界」の驚異
――キリスト教宣教とアメリカ先住民
話者　齋藤晃(本館 教授)
※申込不要、参加無料(要特別展示または展示観覧券)

刊行物紹介

■中牧 弘允、日置 弘一郎、竹内 惠行 編
『テキスト 経営人類学』
東方出版　2,000円(税別)

大学共同利用機関の根幹的な機能である共同研究から、文化人類学の「学派」が誕生しました。利潤や株主配当を優先させるような会社理解に対して学問的に「待った」をかけました。そこでは「多様な解釈」に基づく文化的な存在としての会社が描写されています。「経営人類学」初のテキストです。

■吉岡 乾 著
『現地嫌いなフィールド言語学者、かく語りき。』
創元社　1,800円(税別)

多様性の大切さが説かれ始めている昨今の世の中、フィールドが嫌いなフィールド研究者が居てもいいじゃないか。そういう気持ちで心情を吐露しつつ、ついでに言語学や言語を紹介する、全篇書き下ろしエッセイ集。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く） FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会

会場　本館第5セミナー室(当日先着順・定員96名)
※会員無料(会員証提示)、一般500円

10月の友の会講演会は第2土曜日に開催します。

第493回　10月12日(土)13時30分～14時40分
【特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」関連】
対談 幻獣！――そこに〝在る〟不思議な生きもの
話者　湯本豪一(妖怪・幻獣研究者)
　　山中由里子(本館 教授)

※講演会終了後、特別展の見学をお楽しみください。展示場内で話者が質問にお答えします。入館には、会員証もしくは特別展示観覧券が必要です。本講演会にご参加の維持会員、正会員の方は、無料で入館いただけます。

第494回　11月2日(土)13時30分～14時40分
マウシムを生きる人びとの歴史
――19世紀ペルシア湾の生業、交易、移動
講師　鈴木英明(本館 助教)

マウシムとはアラビア語で季節を意味し、「モンスーン(季節風)」の語源にもなっています。紀元後1世紀半ばの『エリュトラー海案内記』にも登場するモンスーンは、ただ航海時期と交易の季節を定めるばかりでなく、その影響下にある人びとの生業や航海活動に留まらない人びとの移動の時期も定めていました。本講演では特に19世紀のペルシア湾に焦点を当てて、季節風と人びとの生業、交易、移動とがどのように連動しているのかを考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

みんぱく満喫！3カ月！
国立民族学博物館友の会体験会員のご案内

展示も催しも刊行物も、みんぱくをじっくり楽しんでいただける期間限定の体験プランをご用意しました。みんぱく友の会正会員と同様のサービスを3カ月間ご利用いただけます。登録期間中『月刊みんぱく』を4冊お届けします。

申込締切：10月20日(日)(要登録費用)

想像界の生物相

鷲の王ジャタユ

民博 人類基礎理論研究部　福岡 正太（ふくおか しょうた）

資料名｜舞踊劇ワヤン・オランの衣装（ジャタユ）
標本番号｜H0004154
地域｜インドネシア
備考｜特別展「驚異と怪異 ── 想像界の生きものたち」で展示中（11月26日まで）

＊撮影：大道雪代

ジャターユはインド起源の叙事詩『ラーマーヤナ』に登場する鷲（わし）の王である。魔王ラーヴァナにさらわれたシーター姫を助けようとするが、魔王との戦いに敗れ命を落とす。

◆◆◆ジャターユと魔王の戦い◆◆◆

ラーマ王子は第二王妃の計略によりアヨーディヤ国を追われ、妻のシーター姫と弟ラクシュマナ王子をともない森に暮らしていた。シーター姫に横恋慕（よこれんぼ）する魔王ラーヴァナは一計を案じて、二人の王子を遠ざけ、その隙に姫をさらってしまう。鷲の王ジャターユがそこにあらわれ、魔王に襲いかかる。しかしジャターユは魔王の武器により翼を切り裂かれて地上に落ち、姫は連れ去られる。姫がいなくなったことに気づいた両王子は姫の行方を捜すうち、瀕死（ひんし）のジャターユを発見する。ジャターユは事情をラーマ王子に伝えると息を引きとり、王子は丁重に鷲の王をとむらい、その魂を昇天させるのだ。

◆◆◆ジャターユの兄、サンパーティ◆◆◆

『ラーマーヤナ』において、ジャターユはサンパーティの弟とされる。二人はどちらがより高く飛べるか競い合ううち、太陽に近づきその炎に焼かれそうになる。翼を広げジャターユをかばったサンパーティは、翼を失ってジャターユと別れ別れになって地上に落ちる。地上に落ちたサンパーティは、苦行者の予言にしたがい、ラーマ王子を助けるべく長いあいだそこにとどまっていた。

あるとき、シーター姫探索の命を受けた猿たちが、その任を果たせずサンパーティに出くわす。サンパーティは猿たちを食べてしまおうとするが、シーター姫を守ろうとして命を落としたジャターユの話を聞きつける。サンパーティはそれが自分の弟であることを告げ、助力を申し出る。千里眼により姫を見通してその居場所を猿たちに告げると、サンパーティの翼は再生した。

◆◆◆インドネシアのジャタユ・鳥◆◆◆

『ラーマーヤナ』は東南アジアにも伝わり、原典にはないエピソードや異説を生み出しながら、今日にいたるまで人びとに愛されてきた。インドネシアでは、ジャターユはジャタユ、サンパーティはスンパティとよばれ、ガルダ（ガルーダ）とならび航空会社の名称にも使われた。ちなみにガルダは『ラーマーヤナ』原典ではジャターユとサンパーティ二人の叔父とされるが、インドネシアでは兄弟として語られることもある。ジャワ島中部の遺跡プランバナンで演じられる『ラーマーヤナ』舞踊劇やバリ島のケチャなど、二〇世紀に生み出され観光客にも楽しまれている芸能においてもジャタユが登場する。

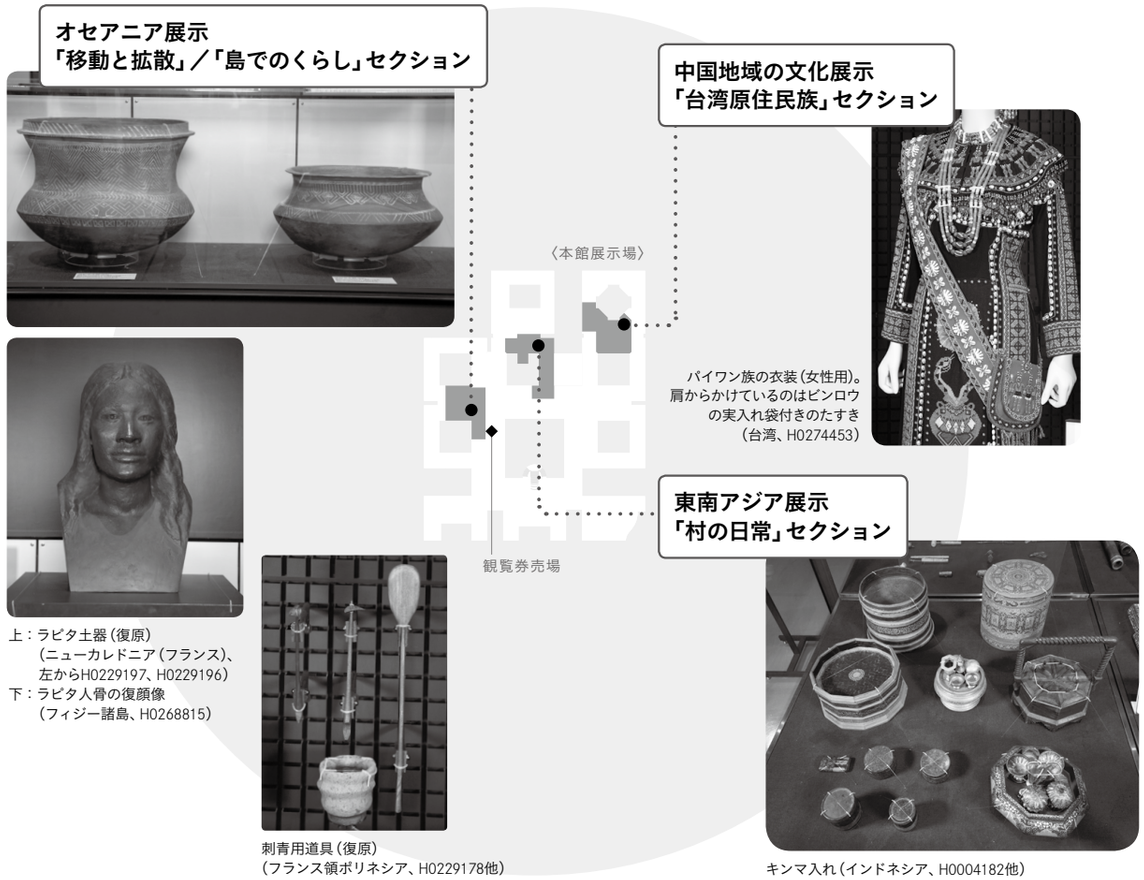
プランバナンに併設された劇場で上演される『ラーマーヤナ』舞踊劇において、ラーマ王子とラクシュマナ王子にシーター姫誘拐の事情を告げるジャタユ（2009年）

ジャワ島北海岸の町チルボンにある王宮のひとつカノマン王宮には、パクシ・ナガ・リマンとよばれる馬車が伝えられている。パクシは鳥、ナガは蛇、リマンは象の意であり、これらが一体となった生き物が馬車に刻まれている。いずれもヒンドゥーの神話においてしばしば大きな力を発揮する動物である。ジャタユの叔父ガルダはヴィシュヌ神の乗り物、また父アルナは太陽神スーリアの馬車の御者とされる。『ラーマーヤナ』におけるジャタユの活躍なども加わり、王の乗り物に刻むべき動物のひとつとして鳥のイメージが形成されてきたのだろう。

※本稿は特別展図録『驚異と怪異 ── 想像界の生きものたち』に掲載されたコラムに加筆・修正したものです。

ラピタ土器と鋸歯印文

民博 人類文明誌研究部　小野 林太郎（おの りんたろう）



上：ラピタ土器（復原）
（ニューカレドニア（フランス）、左からH0229197、H0229196）
下：ラピタ人骨の復顔像
（フィジー諸島、H0268815）

刺青用道具（復原）
（フランス領ポリネシア、H0229178他）

パイワン族の衣装（女性用）。肩からかけているのはビンロウの実入れ袋付きのたすき（台湾、H0274453）

キンマ入れ（インドネシア、H0004182他）

本館展示の入口に位置するオセアニア展示場には、ニューカレドニアで出土した美しいラピタ土器（復原）がある。ラピタ土器は、一九五〇年代にニューカレドニアのラピタ遺跡で初めて発見されたことから、その名称が付いた。赤色スリップとよばれる赤地の土器肌に「鋸歯印文（きょしいんもん）」による人面や幾何学文様のほか、直線や円弧を複雑に組み合わせた装飾が施される美しい土器だ。このほかに「円文（えんもん）」とよばれる円形の印文がセットで装飾される土器も多い。さらにこれらの印文に白い石灰の粉を充填して焼成し、土器の赤地に白い文様を浮かび上がらせ、その美的効果を高める工夫も認められる。

なかでももっとも特徴的なのが、鋸歯印文の文様である。一般的な刺突文（しとつもん）のように一点ごと刺突するのではなく、櫛（くし）や鋸（のこぎり）のように複数の突起をもつ道具を用い、入れ墨と同じような方法で土器肌に文様を刻み込んでいく。そこに白い石灰を充填するところなどは、まさに人肌に墨を埋め込む入れ墨と重なる。英語で入れ墨を意味する「タトゥー」はポリネシア語の「タタウ」が起源といわれているが、オーストロネシア語族圏では今でも入れ墨は重要な文化要素のひとつ。さまざまな入れ墨用具が各地にみられる。一方、石灰は嗜好品（しこうひん）となるビンロウ（キンマ）を噛（か）む際の必須アイテムだ。これらを入れる用具もオーストロネシア語族圏に広く普及している。

ヴァヌアツで出土したラピタ土器の鋸歯印文（2009年）

オセアニアの人類史を語る土器

ラピタ土器はその美しさから、多くの考古学者を魅了してきた。その結果、この土器が西はビスマルク諸島から、東はポリネシアのサモアやトンガ諸島まで、じつに約五〇〇〇キロメートルの範囲で分布することがわかった。ニューギニア島も含め、オセアニアではより古い確実な年代を伴う土器がなく、ラピタ土器はオセアニアにおける最古の土器であることも確定した。今ではこの土器が、アジアを起源とし、農耕や牧畜の技術を備えたあらたな移住集団によってもち込まれたものと認識されている。言語学的には、この集団こそがオセアニアにおける最初のオーストロネシア語族の仲間とされ、彼らはその土器名にちなみ、ラピタ人とよばれるようになった。

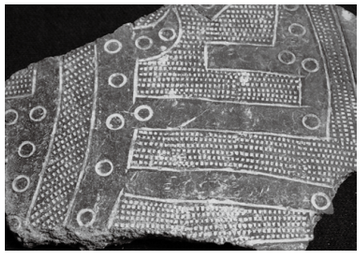
当初、その特徴ゆえにラピタ土器の起源地を探るのは容易だと思われてきた。言語学的には、台湾原住民族による語群がもっとも古いオーストロネシア語族の仲間とされる。この理解に基づくなら、ラピタ土器につながる鋸歯印文土器も、台湾やその南に位置する東南アジア島嶼（とうしょ）部でより古くに出現していなければならない。ところが予想に反し、この地域にある新石器時代の遺跡からは、赤色スリップ式土器や円文が装飾された土器は発見されてきたものの、鋸歯印文土器は長らく見つからなかった。

ようやく近年、フィリピンのルソン島北部で、ラピタ土器より数百年古いシンプルな鋸歯印文土器が発見され、また台湾でも類似した土器が存在したことがわかってきた。オセアニアでもミクロネシアのマリアナ諸島で最初に出現した土器に、鋸歯印文や石灰の充填が見られ、その共通性に注目が集まりつつある。土器という物質文化からも、ラピタ人の起源地は台湾とその周辺の島嶼域である可能性が強まってきたことになる。

インドネシアでのあらたな発見

しかし、それ以外の地域で鋸歯印文土器が出ることは皆無だった。例えばインドネシアでは、今世紀に入るまで鋸歯印文の出土は一点も確認されていなかった。ところが二〇一〇年以降、スラウェシ島で鋸歯印文土器の発見が相次いでいる。北部のミナハサ半島では数点だが、鋸歯印文と円文に石灰が充填された土器片が出土した。さらにわたしが二〇一六年から発掘している中スラウェシ沿岸の洞窟遺跡でも、大量の鋸歯印文土器が岩陰の埋葬遺跡より出土した。

これらの土器に描かれる鋸歯印文のデザインは、ラピタ土器とはやや異なるものの、じつに多様性に満ち、石灰が充填された美しい土器も多い。ラピタ土器と同じく円文が施されたものもあり、さらに人面像が描かれているものもあった。ともに出土した二次埋葬人骨の年代測定結果はまだ出ていないが、スラウェシにおける近年の発見は、オセアニアまで拡散した初期のオーストロネシア語族がインドネシア方面にも確実に到達していたことを示している。ラピタ土器とその鋸歯印文は、オセアニアの人類史を紐解（ひもと）くうえで、今でも重要な物質文化であり、考古学者のみならず多くの人びとを魅了してやまない芸術作品でもあるといえよう。



中スラウェシ沿岸で出土した鋸歯印文土器。表面には円文や石灰充填による文様が見える（2016年）

シネ倶楽部

人生の驚きと不思議に心打たれる映画

飯泉 菜穂子
民博 人類基礎理論研究部

「ワンダーストラック」

原題： Wonderstruck
2017年／アメリカ／英語／117分／DVDあり
監督：トッド・ヘインズ
出演：オークス・フェグリー、ミリセント・シモンズ 、ジュリアン・ムーア、ミシェル・ウィリアムズほか
2019年11月のみんぱく映画会にて上映予定（詳細は12頁をご覧ください）

主人公の一人ローズと兄のウォルター。ウォルターはニューヨーク自然史博物館に勤務している（PHOTO : Mary Cybulski）

愛おしい映画

人生の早い時期に手話の世界に足を踏み入れ、縁あって今博物館で仕事をしている。そんなわたしにとって「ワンダーストラック」は、とても愛おしい映画だ。さまざまな切り口で語ることができる作品であるが、今回は、ろう者が登場する映画という視点で紹介したい。ろう者を登場人物とする映画はこれまでにもたくさん作られてきたが、成長期にある少年・少女を物語のメインに据えたところに、本作の新しさがある。

「ワンダーストラック」の主人公は異なる時代を生きる二人、一九二七年のニュージャージーで暮らす少女ローズと一九七七年のミネソタで暮らす少年ベンだ。二人の共通点は大切な人を喪失した寄る辺なさ。そして、自分は何者なのか？　どこからきてどこへ行くべきなのかを見つけたいという強い衝動と意志だ。

二人のもうひとつの共通点は、耳が聞こえないこと。ローズは生まれつきのろう者である。裕福な家庭に生まれた彼女は、家庭教師から口話（こうわ）（相手の話は唇の動きを「読話」し自分の言いたいことは「発声」する）のトレーニングを受けている。彼女の周囲には他にろう者はおらず、手話は習得していない。一方、ベンはごく最近アクシデントによって聴力を失ったばかりである。五〇年という時を隔てマンハッタンを迷走する二人は、やがてニューヨーク自然史博物館にたどり着く。

もう一人の主人公ベンと、ベンとマンハッタンで出会うジェイミー。ジェイミーの父もニューヨーク自然史博物館で働いている（PHOTO : Mary Cybulski）

映画が描く時代と手法

本映画はローズのパートをモノクロのサイレント映画として描くことで、ベンのパートが描くポップで猥雑（わいざつ）で色彩にあふれるニューヨークと鮮やかに対比させている。同時に、両パートの音楽やキーワード・キーアイテムを共有することで、ふたつの時代の行き来に違和感を感じさせない。「夏休みの少年・少女の成長物語」「子ども同士のバディ・ムービー」の趣に、並走するふたつの物語が交わるのか否かという「謎解きの要素」も加わり、観る者の心を離さない巧みな作りになっている。「暗闇から見上げる星々」というキーワードを昇華させたラストシーンまで、伏線のはり方と回収もじつに見事だ。

一九二〇年代は、映画がサイレントからトーキーに切り替わろうとしていた過渡期にあたりローズの生きる一九二七年はまさに初めてのトーキー長編映画「ジャズ・シンガー」が封切られた年である。一方、ベンが暮らす一九七七年はいわゆるアメリカン・ニューシネマとよばれる一連の動きの終盤にあたる時代だ。映画史的にもエポックといえるだろうふたつの時代が舞台に選ばれていることはとても興味深い。

「聞こえない人」「聞こえないこと」の描き方

設定上は手話を習得していないことになっているローズを演じているミリセント・シモンズ（撮影時一三歳）はろう者であり手話話者である。オーディションビデオで「わたしはろうに生まれて良かったと思っている。手話は美しく素晴らしいことばよ」と言い切ったという。ティーンエイジャーながらしっかりしたデフ・アイデンティティー（ろう者であることに対するゆるぎない矜持（きょうじ））をもった彼女は自身の母語である手話を封印して役作りをしたということになる。ローズのパートでモノクロ・サイレント映画という手法が成功した大きな要因は、ミリセントの圧倒的な自力と存在感だ。

ところで、サイレント映画時代のチャップリンはろうの役者を好んで聴者役にキャスティングしていたという。じつは本作でも、モノクロパートには多くのろう者の役者が出演し「聞こえる人（聴者）の役」を演じていることを鑑賞後に知った。ローズの実家のメイド、家庭教師、劇場で上演中の芝居の演者たち、ニューヨーク自然史博物館で働く女性、警察官の一人。なるほどどの役も出番は短くても強い印象を残す。

全編をとおして「聞こえないこと」がネガティブに描かれていないことが好ましく、脚本家と監督がろうを文化としてとらえ、その文化に敬意を払い、時間をかけて取材や研究をしたのであろうことが見てとれる。

驚きの宝庫である「博物館」へ

国立民族学博物館では、現在開催中の特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」の関連イベントとして一月九日に、「みんぱく映画会」でこの作品を上映する予定である。是非、作中でも紹介される〝驚異の部屋〟の究極の進化形である博物館で、この愛おしい映画を共有していただきたい。そう、これは「博物館を描く映画」でもあるのだから。

ことばの迷い道

「青野菜」は青色?

磯部 大吾（いそべ だいご）
みんぱく手話部門研究支援事務補佐員

「青」といえば、どのような色彩を連想するだろうか。人によってさまざまで、花や海、空、信号の色などがあるだろうと思う。かつて筆者は、信号の色は緑色だけれど、「青」とよぶのは例外だと思い込んでいた。

そんな筆者にとって、ある意味で「青」を再定義する機会となった出来事があった。筆者は数年前、手話言語学を学ぶために、香港中文大学に長期留学していた。ある日、意味論の授業において教授が「青」と板書し、これに相当する色は色彩一覧表のどの色かを指してほしいと、筆者を指名した。当たり前のように青色を指したら、香港の学生が「違う」と言って、緑色を指した。何だか頭を撃たれたような衝撃を受けた。筆者が「違うよ、それは緑色だ」と香港手話で訴えたが、香港の学生は「あなたこそ、間違っている」と頑として認めてくれない。譲り合えないので、「英語の『Blue』『Green』はどう?」と香港手話で尋ねたら、青色、緑色を指した。ふと考えてみたら、愛飲している〝青〟島ビールが、ラベルも瓶も緑色をしていることに気づいた。確かに香港の生徒が言ったとおりに〝青〟島ビールの「青」は緑色だと、我ながら妙に納得した。

漢字文化圏なら、ある程度同じ文化、あるいは同じ視点であって当然だと思い込んでいた。論語とかの東洋古典にある「義」、「愛」などといった抽象概念にしても、ほぼ同じ理解であるはずだと。しかし、中国語圏では「青」は、日本でいう緑色だったことに気づき、すごく考えさせられたのだった。

調べてみると、平安時代の「アヲ」とは青色と緑色、両方を指していることがわかった。「青」は幅広い色調をもっているので、それが頭につく語彙だけでも『日本国語大辞典』には六一〇もの項目がある。改めて「あお」を漢字であらわすと「青、蒼、碧」である。本来、「蒼」が示した色は緑色で、「碧」とは青緑色。「青」は広義的で、辞書によれば、青色、緑色、灰色、黒色、白色が含まれる。青色、緑色だけでなく、青みがかった灰色や、艶（つや）やかな黒毛を「青毛」、また「青白色」といって青みがかった白色を意味する場合もある。

おもしろいことに、自然界において食べ物で青色のように見えるのは「青魚」のみだ。いわゆる「青野菜」、「青リンゴ」は緑色をしているし、食べ物以外の「青虫」、「青山」なんかも緑色をしている。改めて考えてみれば、青色のものといったら、空、海、青魚、花くらいだ。いわゆる青色は、自然界では数的に稀（まれ）だといえる。つまり、自然界において「青」は緑色という意味合いが強いのではないだろうか?「青」について具体的なもののみならず、抽象的なイメージを探るのもおもしろいかも知れない。「青息吐息」「青い鳥」「青臭い」「青男（あおおとこ／あおびれおとこ）」などなど。

ことばの意味を知ることは、言語の森にわけ入って探究していくようなことではないか。とはいえ、文豪開高健（かいこうたけし）の名言に「成熟するためには遠回りしなければならない」とある。ことばの意味や定義を知ることにより、視点が変わり、世界の見え方（理解）も変わっていくと確信している。森羅万象に対する筆者の見識は広がりつつあるけれど、まだ青二才だ。

月刊みんぱく 2019 10月号

編集後記

人は物事に名を付けることによって、その他とわけて理解する。名付けによって初めて物事が立ちあらわれるのだ。だが、逆にいえば、既成の名を付けると、どうしてもそのイメージに囚(とら)われてしまうことになる。企画展にアルテ・ポプラルという聞きなれないことばを用いる意図は、それを避けるためで、そのまま「アルテ・ポプラル」として受け止めてほしいと企画者はいう。これは、是非とも観ていただくしかない。

イメージに囚われるといえば、民族学博物館における展示だから、伝統的な「村の」人びとの芸術だろうというのも思い違いだ。「007」の映画を機に、ごく最近始まった死者の日パレードで甦(よみがえ)った骸骨人形や、ゲバラやサパタの肖像画に象徴されるように極めて政治的なストリートアートの造形などが展示される。芸術分野は特にそうだが、文化は必ずしも保守的ではなく、静的なものでもない。むしろ、革新的かつ動的で、しばしば政治的なものである。そろそろ民族学博物館における展示だからこそ、現在進行形の文化の動態が観られるというイメージが定着してもよいのではないか。特集からは、本企画展もそこに向けた積み重ねの確かな一歩になることが伝わってくる。（南真木人）

●表紙：メキシコ人陶芸家アルフォンソ・ソテノ作
《生命の木》（H0326350）

次号の予告

特集

「ラグビーという文化」

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員
『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員
『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

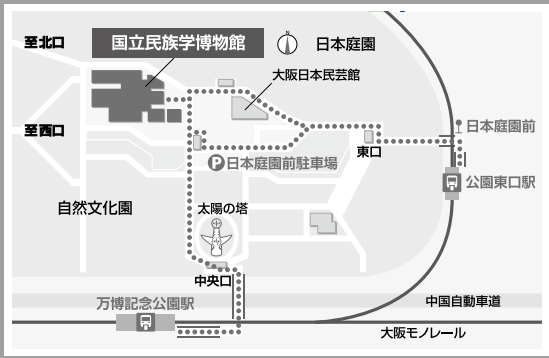
月刊みんぱく 2019年10月号
第43巻第10号通巻第505号　2019年10月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん みんぱく

MINPAKU

企画展「アルテ・ポプラル ―メキシコの造形表現のいま」

関連商品のご紹介

まもなく開幕の企画展にあわせ、本館ミュージアム・ショップでは関連グッズを多数とりそろえました。
メキシコ・オアハカ市で作られた色鮮やかな木彫アレブリヘや毛糸絵などは、現地の作家が制作した一点ものです（壊れやすいため、店頭のみの販売です）。展示観覧のあとは、ミュージアム・ショップへお越しください。

お問い合わせ　ミュージアム・ショップ　e-mail: shop@senri-f.or.jp　水曜日定休

＊写真はイメージです。

国立民族学博物館友の会

みんぱく満喫！3ヵ月！　体験会員のご案内

申込締切
10月20日（日）
登録費用
4,000円

展示も催しも刊行物も、みんぱくをじっくり楽しんでいただける期間限定の体験プラン。
みんぱく友の会正会員と同様のサービスを3ヵ月間ご利用いただけます。
観て！ 読んで！ 参加して！ みんぱくを満喫してください。

『月刊みんぱく』8月号
特集「驚異と怪異――想像界の生きものたち」
プレゼント！

体験会員にご登録いただくと『月刊みんぱく』を毎月お手元まで郵送いたします。登録期間中に発行する3冊に加え、8月号（特別展関連号）をお届けします。

ご利用内容

- 本館展示の無料入館（何度でも）＊
- 特別展示の観覧料割引（何度でも）＊
- 『月刊みんぱく』の送付（3冊）
- 『季刊民族学』の送付（1冊）
  特集「小泉八雲の怪異探究（仮）」
- 友の会講演会・東京講演会への無料参加 ＊
- 館内レストラン、ミュージアム・ショップでの割引
- 提携館の割引

＊同伴者も1名に限り適用

国立民族学博物館友の会
ご利用内容にあわせて、さまざまな会員種別をご用意しています。
詳細は国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。
電話 06－6877－8893（平日 9:00～17:00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/